

2020年12月13日 礼拝説教要旨
 詩編講解説教40「もろびとこぞりて」
 詩編40：2～7、フィリピ2：6～11

今日は詩編第40編の特に前半部分のところを読みます。ここはお読みになられてもお分かりのように感謝の歌となっております。詩人が神さまの救いの御業を感謝し讃えているという内容です。しかし先週読みました第39編は反対に嘆きの詩編でありました。第39編は重い病を患った詩人が、人生の最期、意識の朦朧とする中で、人生を振り返りながら歌うという内容でした。この飛躍は一体どういうことでしょうか。ある人は、その飛躍を奇跡的に病が癒されたというふうに説明します。また別の人は、これは39編のような地獄の状況から救われることを示すのが40編だという説明をしています。その中でダンテの『神曲』を引用しながら、天国にある贖われた者の存在を語ります。つまりこの飛躍にこそ、教会が語るべき福音、罪を贖われ、天国に引き上げられた者の賛美があるという解釈です。

「滅びの穴、泥沼」（3節）とあります。「穴」というのは詩編では陰府、死者の行く場所と理解されます。しかも「泥沼」ですから一度入り込んだら自分の力では抜け出せない状況です。動けば動くほど深みにはまっていく。そこは完全に救いのない場所です。それは素直に死と受け止めてよいでしょう。病の果てにこの人は死んだのです。けれども神さまはその存在を捨て置かれず、「主は耳を傾けて、叫びを聞いてくださった」。そして滅びの穴から「わたしを引き上げ、わたしの足を岩の上に立たせ」てくださったのであります。

そのために神さまは何をされたのか。自らその深みに降りて行かれました。言うまでもなくそれがイエス・キリストの救いです。神さまが真の人となられた受肉の出来事、クリスマスです。わたしたちの叫びをただ聞いておられるのではなく、わたしたちのはまり込んだ泥沼、滅びの穴まで降りて来てくださる。そこにクリスマスの出来事に示された救いがあります。そして「わたしの足を岩の上に立たせ、しっかりと歩ませて」くださるのです。このイメージは面白い。これはちょうど泥沼にはまり込んで足をかける場所がない。でもその中で足をかける場所、岩を見つける。そのようにしてわたしたちは岩を踏み台にして泥沼から抜け出すことができる。そのために主は泥沼の深みの中に自らを沈められたということです。それが十字架の死でなくて何でしょう。使徒信条では「陰府にくだり」と告白します。そのようにして主自らわたしたちの足を乗せる岩となられました。そこに救いがあります。

そのようにしてご自身が救いの岩、踏み台となってくださったから、わたしたちは罪の深みから抜け出せるのです。そして「人はこぞって主を仰ぎ見、主を畏れ敬い、主に依り頼む」（4節）陰府の深みから神さまの御前に回復される救いがここにあります。これこそ三日目によみがえられたイエス・キリストの救いに他なりません。そしてわたしたちもこのよみがえりのキリストによって陰府から引き上げられるのです。そこに最終的なことがあります。わたしたちは死んで終わりではない。その滅びの穴から神さまはわたしたちを引き上げて、御前に回復させてくださる。第40編はそのようなキリストの救いを雄弁に語っています。

そして神さまの救いに生かされた者の姿が6、7節に示されています。「わたしの神、主よ、あなたは多くの不思議な業を成し遂げられます。あなたに並ぶものはありません。わたしたちに対する数知れない御計らいをわたしは語り伝えて行きます。あなたはいけにえも、穀物の供え

物も望まず、焼き尽くす供え物も、罪の代償の供え物も求めず、ただ、わたしの耳を開いてくださいました」(6～7節) キリストの救いの前にわたしたちのどんないけにえも、供え物も意味はなくなります。そういうわたしたちの行為が求められているわけではありません。キリストがいけにえとなられ、完全な供え物となられて、すべてを成し遂げてくださいました。だからわたしたちはただ神さまの救いの御言葉、福音を聞くだけでいいのです。「ただわたしの耳を開いてくださいました」とある通りです。そしてただわたしたちはこの神さまの御計らいを、偉大な御業を語り伝えていだけなのです。

もう一度4節に戻しましょう。「わたしの口に新しい歌を、わたしたちの神への賛美を授けてくださった。人はこぞって主を仰ぎ見、主を畏れ敬い、主に依り頼む」(4節) ここの救われた者の姿が示されています。それは賛美です。神さまを讃える歌でその口は満たされるのです。来週はクリスマスの礼拝をまもりますが、クリスマスは何と言っても賛美の季節です。たくさんの美しい讃美歌があります。今年はコロナであまり賛美ができませんが、でも一人部屋の中で、心の中でも歌うことができます。クリスマスの讃美歌をたくさん口ずさんでください。

クリスマスが来ると思い出すことがあります。今から4年前、震災の年のクリスマスは12月25日のクリスマスの日がクリスマス礼拝でした。その前の日、クリスマスイヴの日に教会員の多賀幹男さんが天に召されました。25日のクリスマス礼拝の後に前夜の祈りをし、翌日教会で葬儀をしました。その年は震災で熊本を離れた友が何人もいました。その上、愛する多賀兄を天国に送らなければならなかった。ですからその年のクリスマスほど悲しく寂しいクリスマスはないと思った。でもその時の葬儀はクリスマスの賛美で満ちあふれました。それは多賀兄の愛唱讃美歌が112番「もろびとこぞりて」だったからです。葬儀でクリスマスの讃美歌を歌うという経験は初めてでしたが何か不思議な感じがしました。寂しいけれども寂しくない。「人はこぞって主を仰ぎ見」(4節) 天に召された兄弟も地上にいるわたしたちも共に御前に賛美を捧げているように思いました。フィリピ書の御言葉を思い出します。「こうして天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです」(2:10～11)

この詩人は病の果てに死んだのかもしれませんが。でもその存在は決して陰府に捨て置かれるのではない。神さまの御許に引き上げられるのです。そしてその口には新しい歌、神さまへの賛美の歌がある。主を礼拝しているのです。結局、わたしたちは生きたように死ぬのです。信仰者であれば、信仰者として、主を礼拝する。主を賛美して死ぬのです。そのようなわたしたちの最期のことが今日のところにも見えています。